

咲き誇れ秋田

日銀秋田支店長の目

「ご注文のお料理を持ってきましたにゃん」

皆さんはこのフリースをお聞きになったことがあるだろうか。大手ファミリールレストランで人気のネコ型配膳ロボットの声である。ネコ型というのは、ネコとおぼしき耳があり、正面の電子画面にネコのような目と鼻が表示され、頭を手でなでると「うれしいにゃ」と喜び、触り過ぎると「しつこいにゃ」と言ってしまう表情になる、ネコそのものだからである。

胴体部分にある配膳台に料理をのせて、テーブル付近まで来る。お客さんが配膳台から料理を取れば、「失礼するにゃ」と言いつつ鼻歌を歌いながら厨房へと戻っていく。この何とも愛らしい存在は、交流サイト（SNS）や年末のテレビ番組でも取り上げられ、全国的に話題となった。秋田県内の系列レストラ

ネコ型ロボットと賃上げ

ンでも、昨年暮れ頃からよく見るようになった。そして私も、このロボット目当てにわざわざお店に行くファンの一人である。

ユーモアあふれるロボットだが、日本製ではなく中国製。製造元のホームページを見ると、1台の値段は約300万円。これを高いとみるかは感覚次第かもしれないが、例えば、秋田の2022年の最低賃金853円

を考えると、1日10時間、月30日稼働させると約1年で元が取れる計算になる。

私たちが日本人は、工場などの自動化、省力化に欠かせない産業ロボットは随分以前からなじみがあるが、こうしたサービスロボットも、親しみやすさとともに徐々に日常社会に浸透しつつあるようだ。

企業の危機感の表れか

日稼働させると約1年で元が取れる計算になる。

私たち日本人は、工場などの自動化、省力化に欠かせない産業ロボットは随分以前からなじみがあるが、こうしたサービスロボットも、親しみやすさとともに徐々に日常社会に浸透しつつあるようだ。



ワードにすると違う世界が見えてくる。

私も日銀の調査では、新型コロナウイルス感染拡大前までの日本の労働力人口は、人口減の中でも高齢者や女性の労働参加により増加していた。ただ、その余力は乏しくなっている。この先のアフターコロナで経済活動が正常化すると、労働力人口の減少とともに早晩、日本全体で労働需給の逼迫や賃金上昇が生じる可能性が指摘されて

言われているが、きつと多くの読者の方はこう思っているだろう。「これは十分な値上げができ、体力のある大企業だからこそこの話。多くの中堅・中小企業はいくら賃上げしたいと思っても無理だ」と。私も同感である。

今取り上げたサービスロボットと相次ぐ賃上げ、これらは一見するとあまり関連がなさそうだが、「人材の確保」をキー

先ほど挙げた事例は、こうした先行きを見越して一足早く人材に頼らない体制を確立したり、大幅な賃上げを行って限りある人材の囲い込みを図ろうとしたりする、企業サイドの危機感の表れとみることもできる。

当地、秋田はどうだろうか。当店の調査分析では、秋田県の労働力人口は全国と異なり、コ

ロナ前から既に大きく減少していた。加えて、労働需給の逼迫度合いを示す有効求人倍率は、2年半前から全国平均を上回り、20〜30代の所定内給与も3年ほど前から高い伸びを示している。秋田では、日本全体で指摘された動きが既に顕在化していると言えるかもしれない。

一方でこんな現象もみられる。県内の60歳以上の女性の労働参加率がここ数年、全国を上回るペースで上昇し、所定内給与も60歳以上が若年層以上に増加しているのである。もちろん、生活のためにはやむを得ず働かざるを得ないケースもあるが、人生100年時代の到来に合わせ、日本人の生活スタイル、人生観の変化といったものが、労働力人口減の先進県である秋田で始まっているのかもしれない。人材の確保の新たな視点として、今後の秋田の動きに注目したい。

（真鍋隆・日本銀行秋田支店長）
〈随時掲載〉